

小国高校 ジャーナル

2009.7

www.ygt-oguni-h.ed.jp

生徒の作品が掲載されました

生徒の文章が、一つは新聞記事の投書欄に、さらにエッセイが「公共の扉をひらく私の挑戦」という書籍に掲載されました。

毎日新聞5月30日(土)付に

島貫菜摘(2年2組)の文章が投書として掲載されました。

度の過ぎた笑い取る番組に疑問

高校生 島貫 菜摘16 (山形県小国町)

ある先生が授業で言った。「最近のテレビはバラエティー番組ばかりでつまらない」。最初はそんなことはないと思ったが、よくよく考えてみると先生の言ったことも分かる気がしてきた。確かに、最近のテレビ番組はバラエティー番組が増えた。今やお笑い芸人ブームである。お笑いが好きな私にとってはバラエティー番組が増えたことはうれしいが、お笑いを好まない人たちにとっては最近のテレビはやはりおもしろくないのだろう。

先日、私は祖母と一緒に笑い番組を見ていた。最初は2人で楽しんで見ていたのだが、度の過ぎた笑いを取る場面があって祖母は突然、チャンネルを変えてしまい、はっとした。このようなことは私の家だけではないと思う。

テレビは全国の老若男女が見ている。お笑いブームはいいのだが、もう少し、番組内容を考えてほしい。テレビがもっと広い世代で楽しめるものになれば、家族のコミュニケーションも深まると思う。

5月30日付 毎日新聞(朝刊)に掲載

公益の扉を
ひらく私の挑戦

【高校生・公益小論文】

東京工業大学
工学部機械設計科



「挑戦」ってなんだろう？
 をおいてきて読んでみたいと思います。
 社会生活において成功と失敗はつきまとう。そして自分自身、
 他を成功と失敗と通して、最終的に自分自身に「挑戦」し続けてい
 く。挑戦に成功することによって、成功と失敗とを繰り返して、成功と失敗と
 出会う。挑戦は「挑戦」を繰り返して成功と失敗とを繰り返す。

徳島大学人間学部
 社会文化学系 教授 佐藤 孝一

高校生を対象にした「公益のすすめ」コンテストが行われ本校の安部成美（2年2組）の作品が入選し、「公益の扉をひらく私の挑戦」という本に掲載されました。

今年のコンテストは「挑戦」をテーマに行われ、全国27都道府県78校から2332点(エッセイ: 2134点・小論文198点)の応募がありました。最終審査に残ったエッセイ15作品、小論文10作品の中から大賞2作品、入選4作品などが選ばれました。

情けない挑戦 安部成美(2年2組)

私が今まで挑戦したことで脳裏に焼きついているのは、いちかばちかの賭けにでたことである。それは、社会のテストの時のこと。難しい漢字が書けなくて、太くなった鉛筆でなんとなくその字に近づけてでたらめに書いて、丸を貰おうとした。それは、私は元来面倒くさがりやなので、その時ががんばろうとしていても、いざやろうとすると、やる気が起きず適当な漢字を書いて勉強してしまっていた。それが何回も続いてしまっていたので、思えばそれが癖になり、本当の漢字が書けないままテストを受けるという事態に結構遭遇した。

さらに適当な字を書いてしまう理由は他にもある。プリントの書き方が汚く、本当の漢字が書かれていないこと。丸付けが面倒くさく、「どうせ、当たっているだろう」と思って、これまた適当に丸をつけていたりしたこと。そして何より、あつてはならないことも。それは、自分の自が読めないという最悪な事態。このように、面倒くさいから始まり、たくさんのがが積み重なり、正しい漢字が書けなくなっていたのだ。

テスト当日。テストには、「平等院鳳凰堂」という答えを書かなければいけない問題が。私はとても焦った。なんと、「平等院鳳凰堂」の「鳳凰」が書けない。そんな中、ふといいことを思いついたのである。そう、それが、その字に似せて丸を貰おうとすることだった。それはその時に満足するだけで、自分のためにはならないということは十分承知してはいたのだが・・・。「やっぱり点数がほしい」という、甘い誘惑に負けてしまった自分。いちかばちかの賭けにでてしまったのだ。

いよいよテストが返却される時、ゆっくり答案用紙を開きその部分を見てみると、なっ、なんと丸がついていたのだ。私はびっくりしたのなんの。なんでかって？ それは、いちかばちかの賭けに勝てたんですもの。それと同時にうれしさもこみ上げてきた。しかし、うれしかったのはその時だけ。丸が付いたのが良くなかったのか、その漢字が未だに書けない始末。残ったのは情けない気持ちのかたまり。

その日を境に私は、面倒くさくても丸付けをしっかりとて、ノートも前よりはきれいに書くようになり、そして何より、自分の字も読めるようになった。二度とせこい手は使わないようにしなければ。

私は今まで挑戦するということは、最後には必ずうれしいことが待っていると思っていた。しかし、今回の私の挑戦は反省が残ってしまう挑戦だった。挑戦の先にあった苦い思い出を、これからの学校生活に活かしたいと思う。